

第3回聖籠町生涯活躍のまち構想研究会 議事要旨

日 時	平成 28 年 10 月 21 日 (金) 13 時 30 分～15 時 50 分
場 所	聖籠町役場会議室
出席者	委 員：窪田昌行会長、天尾壮一郎委員、石塚純委員、岩村正史委員、新谷太郎委員、鈴木典子委員、手嶋京子委員、樋口友貴委員、三品勝義委員、山田耕太委員、望月健三郎オブザーバー（代理） 聖籠町：近藤総務課長、高松総務課長補佐、松井町民課長補佐、中山保健福祉課長補佐、牧野主任 日本総合研究所：渡辺康英、堀米剛
資料	資料 1 調査状況・結果の概要（概要版） 資料 2 聖籠町版生涯活躍のまち構想に関する調査業務 研究会資料（詳細版） 資料 3 住民向けシンポジウム構成（事務局案）

1. 開会

2. 会長あいさつ

3. 議事

（1）移住希望者アンケート実施結果について

事務局 資料説明（アンケート調査結果の概要（資料 1 「Ⅲ. アンケート調査結果」、資料 2 「第 2 章 アンケート調査結果」））

委員 アンケート回答に際し、東京圏在住者に対し、聖籠町の情報は事前に与えているのか。
事務局 町の概要や場所、地理的關係、人口など、聖籠町の概略情報はアンケートの冒頭に記載し、伝えている。加えて、自然条件や特産物、子育て支援や医療・スポーツ環境など、聖籠町の特徴や新潟東港地区のアンケート結果も明示している。

委員 東京圏在住者について、聖籠町や新潟県との地縁関係は整理されているか。
事務局 訪問経験や居住経験別に整理している。東京圏在住者のうち、約 9 割が聖籠町への訪問や居住経験を有さないというアンケート結果となっている。

委員 アンケート実施にあたり、高齢者に対して、地域包括ケアシステムに係る志向を問うような設問があったほうが良かったのではないかと。

委員 地方移住への志向に係る回答として、聖籠町の特徴が出ているような回答はなかったか。他の地域との志向の違いを整理すると、聖籠町への移住を促進するうえでの施策をどう講じれば良いか、ある程度明確になるのではないかと。

事務局 自然環境を求めている移住を志向するという点で、一般的な地方移住への志向と似通った傾

向が見られた。その他、特に若年層が移住候補地として考える傾向が強いというのは聖籠町の特徴的な結果と言える。今後、さらに深堀してクロス集計を実施していくと、聖籠町の傾向がさらに明確になる可能性はある。多数の地域が自地域への移住を推し進めている現状を踏まえると、聖籠町の特徴を前面に押し出していないと、競争で優位に立てないとする。また、ご指摘に対する回答として、移住候補地の可能性として聖籠町に移住の意思を示した人に対して、サービス付き高齢者向け受託が整備された場合の移住意思を問う設問を設けた。

会長 東京圏在住者の20～30歳代 また、新潟県在住者の60歳代の層における聖籠町への移住検討者は具体的にどの程度の規模なのか。

事務局 東京圏在住者、20～30歳代200人のうち約3割程度が、また、新潟圏在住者、60歳代100人のうち2割程度が、聖籠町を移住候補地とする旨の回答を示している。

会長 特に遠方の東京圏在住者の間で、聖籠町への移住ニーズや興味が生じるのは興味深い。これから聖籠町の良さが周知されれば、さらに移住の可能性は高まるだろう。

委員 20歳代は家庭や仕事の制約があると考えますが、その中で地方移住を検討している人はどのような志向を有するのか。

事務局 移住相談窓口に寄せられる一般的な傾向としては、都会のストレスを離れて自然環境を求める人、家族との時間を優先する人など、経済的な豊かさよりも心の豊かさを求める人や、震災のリスクを避け、食や地域の安全を求める人が挙げられる。

委員 東京圏や新潟県在住者の具体的な居住地は分かるのか。それが分かれば、どこの地域に対してどのようなプロモーションを仕掛ければ、聖籠町への移住を促進するうえで有効かということの分析ができる。

事務局 同様の認識である。アンケート回答者の属性に係るローデータをさらに分析することにより、深堀調査が可能となる。

(2) 各種中間報告について

事務局 資料説明（資料1、資料2）

委員 「Ⅳ. 聖籠町版生涯活躍のまちの方向性」について、60歳代の「若いシニア層」をターゲットにする旨の説明があったが、20～30歳代同様に、これらの世代も当面は仕事を続けなければいけない。現在の方向性案は特に仕事について言及していないが、新潟市や新発田市と連携して雇用環境を整備するといった考えも必要ではないか。また、「Ⅴ. 聖籠町版生涯活躍のまちの方向性のメリット・デメリット」で住所地特例について言及しているが、これは移住に伴い対象施設に入居した人に限定された話である。それとは別に、60歳代で聖籠町に一旦移住した後に施設に入った人は特例の対象外となるため、分けて考えるべきである。

会長 指摘のとおり、聖籠町における就業の機会は何らかの形で設けるべきである。なお、住所

地特例について、全体量で見れば、70 歳代前半でも要介護（要支援を含む。）の認定率は約 6%程度であり、例え高齢層の移住が進んだとしても、聖籠町の介護給付費の負担が著しく大きくなるわけではないと考えている。

委員 上記のとおりであれば、そのような事実を町民にもしっかりと明示すべきである。

委員 前回の第 2 回研究会では、聖籠町における生涯活躍のまちの方向性として、インフラ整備といった大きな枠組みの話はまだ定まっていないという認識であったが、本日の説明では、他地域の事例を参考に、既に地域を作るというまちづくりのレベルまで検討が進んでいるように聞こえる。また、「V. 聖籠町版生涯活躍のまちの方向性のメリット・デメリット」についても、一部のメリットはデメリットが変換されて表現されているイメージである。加えて、デメリットに記されるように、まちづくりの整備費を町が負担するというのは、これから町民に説明するうえで不安を感じる。

委員 以前、聖籠町として生涯活躍のまちを導入する方向を向いたほうが良いのか悪いのか検討を進める、という町長の説明があったと思うが。いつの間にか、研究会として生涯活躍の方向を向いている感がある。

事務局 ある程度費用負担の話まで出なければ具体的な判断につながらないと考え、本日の資料は一旦生涯活躍のまちを導入する前提で作成している。これを基に研究会における意見を踏まえ、「できる／できない」のレベルから検討を進めていく考えである。賛成できないという内容も含め、率直な意見をいただきたい。

会長 まずは、上記の前提で仮説を立て、研究会の場で反対意見が出れば、都度改善の方向性を考えるというような進め方でいきたい。最終的には、やるかやらないか、研究会の総意を整理したい。

委員 「V. 聖籠町版生涯活躍のまちの方向性のメリット・デメリット」に示される 24 時間の訪問介護看護について、仮に生涯活躍のまちの計画が無くなった場合も、このサービスは導入する考えなのか。地方はスタッフが集まらずサービスの実現は難しく、新潟県下でも殆ど導入されていない。訪問介護の求人倍率は 10 倍程度になるという話もあり、実現性を懸念している。

事務局 24 時間対応の訪問介護看護は、仮に「わかたけの杜」の事例を踏襲する場合という一つの例に過ぎない。聖籠町として必ずしも前提としているわけではなく、研究会の中で広く意見を募りたい。

会長 国が提示する地域包括ケアシステムのイメージ図があるが、オランダの事例のように、自宅でも施設同等の介護が受けられなければいけないと国や厚生労働省は考えている。個人的には 24 時間、在宅での訪問介護看護が実現できなければ介護保険制度は持続できず、日本全体の課題と捉えている。なお、デンマークの事例を見ると、スタッフ皆が 24 時間フルで常駐しているということではなく、ある程度ピークの時間差はある

委員 ここ 2 年で 4 件ほど、定年退職した人が新潟市中心部の持ち家を息子に譲り、農作業をしたいから聖籠町に移住したいという人がいた。その他にも、山登りやサイクリングが趣味で自然豊かな聖籠町に移住したいという問い合わせもある。車ですぐに新潟市の息子のと

ころに行けること、かつ自然環境を求めるニーズにも適しているとのことであった。このように東京圏や新潟市中心部から聖籠町に人が来るというニーズは実際にある。空き家の購入や修復に係る助成金を出すなど、聖籠町への移住を促す仕組みができないかと思う。

委員 「Ⅳ．聖籠町版生涯活躍のまちの方向性」のイメージ図のように、新たなハコモノを作ること考えるのではなく、聖籠町として持続できるよう、町の魅力を活かした全体像の中で生涯活躍のまちを講じるべきである。例えば、現時点で県外の人々がスポーツ目的で聖籠町に来ることは現実的にありえない。自然豊かなサイクリングロードやランニングコース、水泳コースなど、自然を使って人を呼び込めるものがないかまず考えるべきではないか。また、交流という観点で言えば、道の駅で生産者と対話できる販売環境を設ける、仕事で言えば、土地を貸す際の優遇策を打つなどの民間の誘致策を講じるべきと考える。

会長 指摘を踏まえ、導入規模ではなく、コンセプトという形で生涯活躍のまちのイメージを伝えるべき。

事務局 資料は先行事例を意識しすぎた感があるため、今後の資料を作る際に指摘事項を反映したい。

委員 シェア金沢やわかたけの杜の事例は、エリア的に人が住み慣れた地域に立地しており、それぞれの地域性を活かして成功した事例と捉えている。また、生涯活躍のまちのメリットとは、装置の話ではないか。例えば、まずは 24 時間訪問介護看護や健康維持、交流、定住化のための高齢者住宅、若者向けのドミトリーなどの装置を作ったほうが良いという提案を示し、その後、聖籠町に適したものは何か、聖籠町に合わせるにはどのようにすべきか、という話を研究会において皆で議論すべきと考える。また、「町が財政負担する」という発想は限界ではないか。民間活力を用いて、皆が上手く使えるものを考えて、負担を軽減するような仕組みが必要ではないか。

委員 CCRCは日本ではまだ成功事例はないということを知っており、それをやるということは相当の覚悟がいることと感じている。町としても、生涯活躍のまち構想を中長期の戦略に据えるか据えないかが成否の鍵と考える。また、分析データと生涯活躍のまちの方向性の話が乖離している感がある。町には二つの病院があるが、今後、地域包括ケアシステムを目指すのであれば、介護施設関係施設をネットワークとして整備していく必要があると感じる。例えば、地元の人が親の面倒を見る、関連のある人を町に呼び寄せるといった一つの流れとしてあるが、このような傾向を掴むためにデータを上手く収集しなければいけない。また、地域包括ケアシステムをいかに町に適応させるか、どう住民の理解を得るかというのがポイントと捉えている。

会長 上記の他に事務局より提示した検討案に対する意見・質問があれば、メール・電話でも構わないので次回研究会までに事務局まで提示いただきたい。

(3) シンポジウム内容について

事務局 資料説明（資料3）

委員 シンポジウム構成案に、聖籠町生涯活躍のまちの方向性を報告する旨が記されている。研究会はあと1回だが、シンポジウムまでに方向性のある程度決めなければいけないということか。

事務局 次回研究会で方向性を定めることを目標とはするが、例え定まらなくても、シンポジウムの場では、その時点での研究会の検討の状況・成果を共有する方針である。

委員 聖籠町として、CCRCを導入しなければ町として持続できないということが前提としてあるのか。そうであれば、CCRCの導入がハコモノの整備に留まらず、まちづくりに波及する効果が見込めるから検討を進めているとの理解で良いか。

事務局 その理解で問題ない。CCRC導入に当たり、それを評価できる定量的なバックデータがない以上、何がメリット／デメリットかという議論は当然生じる。町長も、生涯活躍のまちの構想は町が作るものの、それを実現するのは民間であると述べている。つまり、この構想にのる民間事業者が出てこなければそもそも成り立たない話である。まずは、町民の立場を踏まえ、CCRCを導入する方が町にとって有益か、この研究会で議論を重ね、方向性を出したい。シンポジウムの開催の趣旨は、まず町民にCCRCを理解してもらうことにある。具体的な事例を示し、CCRCを理解してもらうというところを開催目標とする。

委員 多くの町民がCCRCを知らないと思う。「そもそもどういうものか」という質問に対する回答を用意しておく必要がある。また、日本各地で導入に失敗しているという事実がある以上、聖籠町の具体的な対応方針を示すのは実際に困難ではないか。

会長 CCRC導入の成功事例が無いというのは、現時点で、政府が指定した263地域ではまだ結論が出ていないという意図である。実際には、これら地域の他にも成功事例・失敗事例は多々ある。

委員 シンポジウムの基調講演は誰が行うのか。聖籠町としての検討方針を整理したうえで、講演者に事前にインプットしておく必要があるのではないか。

事務局 当初はまち・ひと・しごと創生本部の生涯活躍チームからの選出を想定していたが、本日の指摘事項を踏まえ、町としての趣旨を事前に説明するという前提で一から検討していきたい。まずは事務局で候補者を選択したうえで、研究会で議論したい。また、先進事例については、日本総研が事前に調査した例を選定する方針である。

会長 シンポジウム開催日次案については異論ないか。

各委員 （賛同）

(4) その他

事務局 回りの研究会の主な内容は、シンポジウムの構成案の他、本日提示した資料に対する質問・

指摘に対する意見交換を想定している。現時点では、11/24（木）、午後 13 時半からの開催を想定しており、この日程にて後日開催通知を発出する。

4. 閉会

以上